

人とまちをつなぐ「交流ストリート」に、人々の活動があふれ出す交流拠点



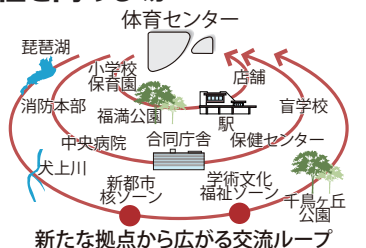
まちに開かれ、みんなが集まってくる南側外観イメージ

提案の着眼点

次の3つの視点に重きを置いて提案します。

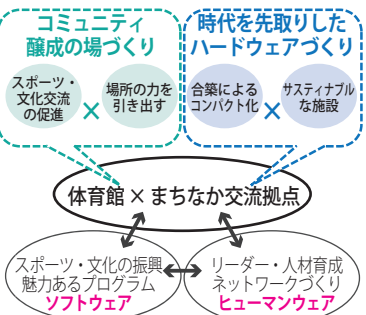
■まちとつながり、育み、回遊性を高める場

・駅から近く、公園や学校や病院、庁舎、消防と近接する本敷地は、まちづくりの上で非常に重要な場と考えます。広域的なまちづくりを意識し、まちの回遊性を取り込み、一体性を高める場とします。



■合築のメリットを最大化するコミュニティ醸成の場づくり

・基本方針より、体育館に求められてきた快適な競技環境づくりに加えて、「コミュニティ醸成の場づくり」、「時代を先取りしたハードウェアづくり」を重視します。スポーツ活動と文化活動のソフトウェアが、人材育成のヒューマンウェアにつながり交流のサイクルが生まれる、交流の核となる場づくりを提案します。



■多様な空間を「ひとつ」に

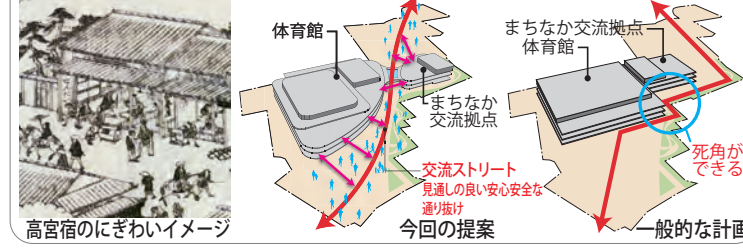
・体育館機能とまちなか交流拠点機能が、まちと密接につながりながら、ひとつまとまりになることを目指します。

まちづくりの新たな核となる交流拠点を目指します

人と人が集う「まちなか交流の拠点」としての施設 環境や地域の歴史・文化に配慮した施設 敷地のもつ力を引き出し、にぎわいと交流を生み出すまちづくりとしての7つの仕掛け

①敷地中央を南北に通るプロムナード「交流ストリート」

・まちの回遊性を取り込んだ交流ストリートが敷地中央を通り抜ける計画とし、江戸期に栄えた中山道宿場街「鳥居宿」「高宮宿」のように、両側に連なる活動スペースが人々を刺激し、にぎわいを生み出します。
・交流ストリートに面してトレーニング室やダンススタジオ、研修室やコミュニティスペースを配置し、スポーツから文化活動まで、様々な活動が垣間見え、市民が関心を高めるきっかけとなります。



高宮宿のにぎわいイメージ 今の提案 一般的な計画

②歩車分離、利用者動線の確保による明快なゾーニング・動線計画

・歩行者の通り抜けは敷地東側、車の通り抜けは敷地西側とし、完全に分離します。敷地東側は歩行者のみの安心安全な交流スペースとなります。
・駐車場は、北側に420台、南側に36台、配置します。
・イベント時、緊急時、搬入時には、車は体育館と校庭の間を南北に通って利用できるようにします。



③南側にも北側にも両方に顔がある施設配置



・駅からアクセスする人々は南側から、車利用者は北側から施設にアプローチし、南北両側から施設利用者が訪れます。施設中央に「エントランス広場」を設けることで、どちらからアクセスしても、人々の活動が発信される「表の顔」のある構成とします。

④五感を刺激する、四季折々の変化に富んだ緑の散策路

・敷地全体をウォーキングコースとし、軽運動やピクニックができる広場やハーブ園を設け、様々な人々が日常的に利用できる場とします。



⑤遺跡集落をテーマとする福満公園と連続する緑とランドスケープ

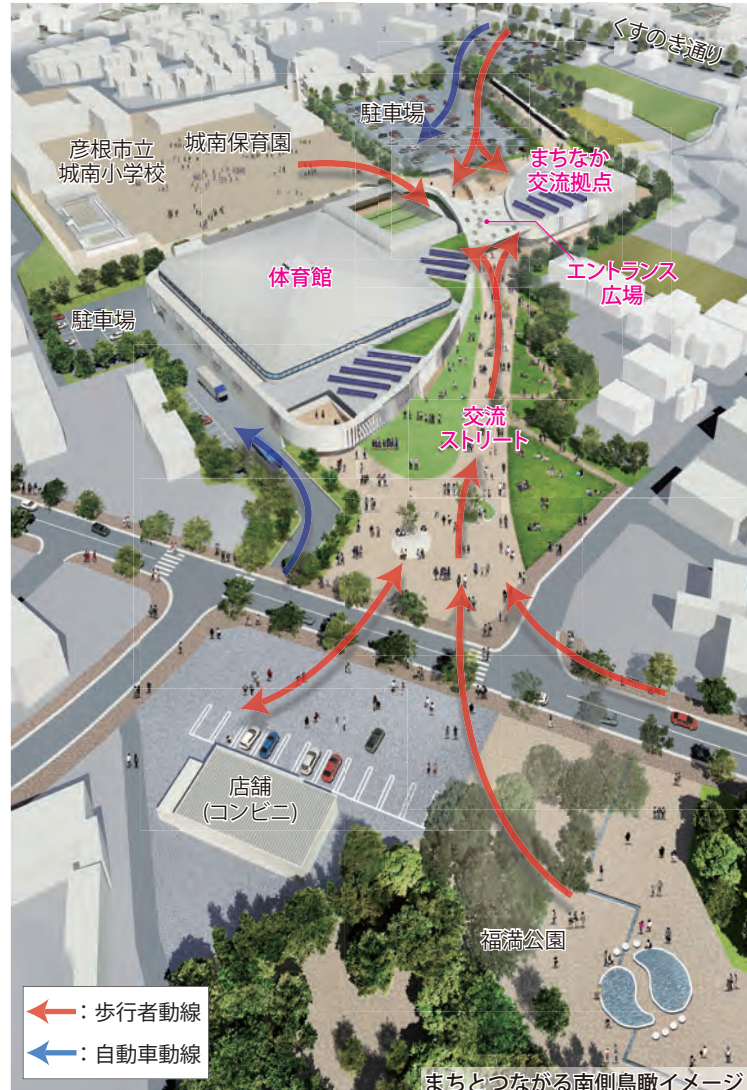
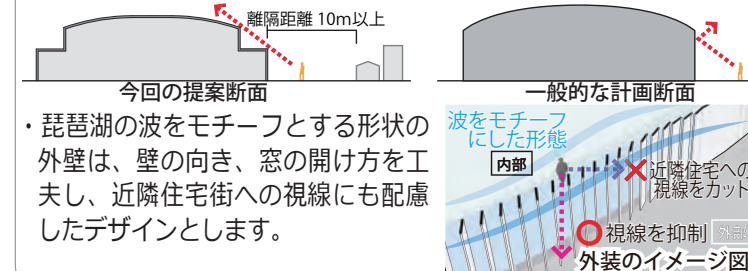
・「交流ストリート」は遺跡をテーマとした福満公園とつながるプロムナードとしてまちの連続性を高めます。緑の基本計画に沿った歴史と自然の緑を結ぶ「グリーンネットワークシティ彦根の創造」の考え方に倣い、豊かな緑のオープンスペースが連続する周遊空間とします。

⑥通学路として、目が行き届く安心安全な設え

・計画地は小学生や園児の通学路として、また周辺住民の通り抜け道として利用されてきました。今回の計画では、より安全に通行できるように、死角の無い、目の行き届く形状とし、安心して利用できるストリートとします。

⑦周辺への影響を最小化するボリューム計画と十分な離隔距離

・敷地周辺からは10m以上の離隔距離を設けます。アリーナは競技に必要な天井高さやイベント等に必要な吊物高さを確保しつつ、必要最小限の建物高さに抑えた計画とし、住宅地や小学校、保育園への圧迫感と日影による影響を最小にします。



まちとつながる南側鳥瞰イメージ